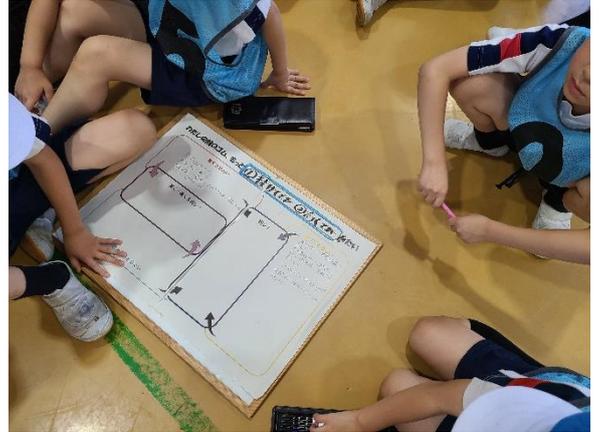


校内研究第一シーズンが終了しました！

実践を終えた先生から、「共創的学びのシナリオの作成、とても難しかった〜！」というお声を寄せていただいております。特に、後述する2点については、多くの先生が感じられた共通の難しさであり、それが今回の研究における大きな「高まり」につながったと私も強く感じています。

この第一シーズンは、まさにシナリオのフォーマット確定のためのパイオニア的役割を担っていただきました。皆様の尽力のおかげで、より精緻で強固なシナリオの記述の視点確立につながりそうです。これは、15日の評価と省察会議でさらに議論を深め、確定させていきたいと考えていま

す。続く第二シーズンでは、この確定された土台の上で、皆が同じ認識を持って、より力強く研究を深められることと確信しています。そして、その成果は「研究発表協議会」へと続いていくことになります。



「学びに向かう力」を精緻に捉える難しさ、そしてその先に見えた可能性

木村自身の実践を振り返ると、これまでは、ともすれば「つくりだす喜びを味わい、主体的に風が物に動きを与える様子のよさや美しさを味わう学習活動に取り組んでいる」というように、「学びに向かう力」をやや抽象的に捉えがちでした。しかし、今回のシナリオ作成を通して、子供たちの「学びに向かう力」をより精緻な視点から可視化できたことは、大きな前進でした。その具体については、シナリオの「9省察」の項にまとめましたので、書き方のサンプルとして皆さんにお示ししたいと思います。認知スキーマの視点を取り入れることで、これまで「ふわっとした印象」で捉えていた「学びに向かう力」が、「具体的な行動や思考の変化」として捉えられるようになり、子供の内発的な学びのプロセスを可視化できたことは、研究の高まりに大きく貢献しているところです。

伴走し、共創することの難しさ。そして「そこでしかできない授業」の価値

今日の田中先生、尾田先生のように、指導者が経験や計画性に基づいて授業を作り上げるのではなく、子供たちと共に中動的な学びの中で伴走し、学びを共創していくことは、今回の研究で挑戦的だった点の一つです。そして、この難しさの根源には、上記の「学びに向かう力」を精緻に捉える視点がありました。

子供たちの学びに向かう力の実際を精緻に見取り、それに伴走していくことで初めて共創が実現することは、以前から校内研究通信等の機会にて述べている通りです。例えばですが、理科における「比べないと分からないから」という子供の言葉から、教師が条件制御の良さを感覚的に捉えていることを見取り、基礎スキーマの構築につなげる場面や、図画工作科で「一人称の視点」から「三人称の視点」への移行を促す教師の意図的な働きかけは、「学びの伴走者」としての教師の役割を具現化するものでした。子供たちの予期せぬ反応や多様な考えを丁寧に拾い上げ、揺さぶりの補助発問や個別最適化された支援を行うことで、子供たちの主体的な学びを促すことができます。

このように、認知スキーマの視点を活用し、子供たちの学びの具体的な変化を捉えながら伴走していくこ

とで、同じ教材や内容であっても、目の前の子供たちの実態に合わせて柔軟に対応する、「そこでしかできない授業」が生まれることを私自身も実感できました。このことは、過度な再現性追求によって子供の創造性や多様な考え方が阻害されるという問題 C への解決策でもあり、教師の専門性と、教師自身が学び続ける姿勢が実践レベルで可視化されてきたと言えるでしょう。

## 課題 C に包摂された課題 B-2 の達成に向けて

今回の「共創的学びのシナリオ」を描く経験は、従来の指導案作成を超え、私たち教官自身の「学びに向かう力」を深く問い直し、研究を大きく深化させる機会となりました。

この第一シーズンの成果と課題を踏まえつつ、第二シーズンでは、課題 B の「生成 AI の進化」の視点も意識していきたいと思います。課題 B は「これからの AI 時代を強く生きる子を育てるために、より一層子供一人一人の人間性を大切に、経験や主観に価値を見いだして教育を押し進める (B-1)」と「生成 AI を積極的に活用する (B-2)」に分かれており、特に B-2 の側面は教師が学び続ける存在であるという課題 C に包含されています。だからこそ、「教師側が」生成 AI を積極的に活用し、その知見を授業に活かしていくことが重要となります（言わずもがなですが、子供にとりあえず生成 AI 使わせるという研究ではありません）。そのため、情報部と協力し、具体的なアクションを起こしていきたいと思います。さらに、滋賀大学の加納先生にも課題 B に関してご講話をいただき、専門的な知見を深めていく予定です。お楽しみに。



## 「ビッグアイデア」と本校研究

本日お昼に、山際先生と「今後の教育課程、学習指導、学習評価等の在り方に関する有識者検討会」の石井英真先生の資料にある「ビッグアイデア」についてお話ししました。

ビッグアイデアが主に「教師がカリキュラムを設計する上での概念的な枠組み」であるのに対し、本校は、その「概念が子供の内面でどのように育まれるか」という、より実践的かつ動的な側面に踏み込んでいます。子供たちの経験や主観が、具体的なスキーマ構築にどう影響し、認知能力の精度を高めていくかを統合的に捉えようとしているのが本校研究ですね。具体的には、「鍵概念」や「抽象的スキーマ」が、単なる知識の枠組みに留まらず、子供の感情、意欲、協調性などの非認知能力と深く結びつき、それらが「学びに向かう力」として可視化されるプロセスまでを具体的に記述しようとしています。ここはまさに、2年目における勝負どころですね。

さて、その段階に達するまでに、まず1年目は「実行力の可視化」をすることが我々の大きな目標になります。そのために、引き続き、子供たちの豊かな学びを「共創」していきましょう。

(木村 仁)